

●町民親しむ美人の湯

青井岳を地元の人には「日向の軽井沢」と自慢する。JR青井岳駅は標高二六六^{メートル}。改札口を出て、めまいを覚えるような石段を下り、国道269号を歩くと、境川に沿って二〇〇三(平成十五)年一月十五日に閉鎖したばかりの天然温泉・国民宿舎「青井岳荘」があり、その横で同六月のオープンを目指して、新しい温泉拠点である「山之口町総合交流活性化センター」の建設が急ピッチで進んでいる。

青井岳荘は一九六九(昭和四十四)年四月、国民保養センターとして開設。さらに七一(同四十六)年五月、町営国民宿舎が併設され、以来、町民憩いの場として親しまれてきた。

これらの建設の際、「町発展のため」と、広大な田畑と山林を手放したのは、青井岳在住の坂元保弘氏の父・重保氏(故人)。その英断がなかったら、憩いの場も温泉も生まれなかった。天

然温泉「美人の湯」と呼ばれていた重曹泉は、炭素水素イオンの含有量が六五〇三^{ミリグラム}もあり、含有量としては日本第二位だったという。湯につかると、肌がすべすべとなる。まさに「美人の湯」であった。

そして今、青井岳荘は三十四年にわたる歴史に幕を閉じ、その役目を新しい憩いの場にバトンをタッチしようとしている。キャンプ場の樹木に囲まれた「山之口町総合交流活性化センター」である。

町が「人にやさしい福祉のまち条例」に基づき、広域的連携を視野に入れた文化振興拠点として建設。事業費約十一億八千万円。良質の泉源を利用した和・洋風の浴場を備えた地上三階、地下一階のバリアフリーの和風建物で、総床面積約三千九百平方^{メートル}、六十人が宿泊できる。特に温泉は広さが青井岳荘の約三倍となり、サウ



総合交流活性化センターの完成予想。自然環境に配慮した和風建築

ナや露天風呂、歩行浴など充実する。

青井岳は自然環境に恵まれ、キャンプ場は毎年夏、家族連れ、若者でにぎわう。大型ログハウス一棟、キャンピング八棟がある。開設は七月一日から八月いっぱい夏の期間だけ。

また、田野町との境にある東岳から流れ出る境川の渓谷のすぐ脇に、夏には流しソーメン「滝水亭」が店開きする。床下を清流が流れ、涼味満点。緑の渓谷で味わうソーメンはまた格別である。

近くの国有林には「森の巨人たち百選」に選ばれた樹齢五百年といわれる高さ約三十^{メートル}の大カヤの巨木がある。

「日向の軽井沢」は来訪者を本物の山村の美で歓迎してくれる。

竹原由紀子